

【本文】

五月、花のころ、江口・神崎の君、美濃の傀儡子あつまりて、花参らせしことありき。歌沙汰ありしに、「延寿、『恋せば』と申す ア(足柄をいまだうたはぬ)とて、イ (御所に習ひまゐらせたき)を、ウ (え申し出でぬ)と、エ(これかれに聞かれ候ふ)」といふと聞きしか ども、聞き入れぬやうにてありしほどに、季時入道して申し出だしたり。「いかで①(さること)はあらむずるぞ。逆さまごとにてぞあらむ。我がためには名聞にてこそあれど、②(かたはらいたし)。さはのあこ丸うたふめるは。それに習へかし」と返事にいふ。a(延寿)また申すやう、「③(いかさまにも習ひまゐらせて候はむこそ、この世のよろこびにては候はめ)。あこ丸は、大進も小大進もみな知り候はぬを、誰に習ひたるぞとおぼつかなく候ふ。またこれらも、さ申せば、かたがたに」と申せば、「のちにこそ。b(これら)居るときありて、聞きとられなむずるは。ひとりあらん時に、さらば教へむ」といひしを、「残りとどまりて習はむ」といたくいひしかば、乙前に「いたくいふ。いかに」とかたりしを、「④(さ申さば、教へさせたまへかし)。さやうにいみじがり申さば、さやうの料にてこそ候へ」とc(乙前)申ししかば、夜々二三夜ばかりにぞ教へたりし。似せぬところも、かたはらいたくおぼえて、⑤(え直さで)、d(我)、良くなるまでうたひてぞ【6】。そののち、暇請ひしに、疾くとてありしをよび返して、うたはせて聞きしに、「神妙なり」といはれて、

四大声聞いかばかり 喜び身よりも余らむ われらは来世の仏ぞと 確かに聞きつる今日なれば

とうたひたりしかば、感に堪へず⑥(して)、唐綾の染付なる二衣を纏頭にしてき。をりふしにつけては興がりておぼえき。

(後白河院【梁塵秘抄口伝】による)

注釈

※歌沙汰ありしに……今様歌の話が出たときに。今様(歌)とは、平安時代末期に大流行した新風の歌謡で、傀儡子や遊女と呼ばれた遊芸を生業とする女性達が中心的な歌手だった

※足柄……今様の曲の一つ

※大進、小大進……いずれも今様の歌手の名

※これら……周囲の者

※乙前……今様の歌手で、この時筆者は乙前に師事していた

※四大声聞……釈迦の四人の弟子

※纏頭(てんとう)……褒美の品

【問題】

問一 傍線部①が指し示すものは次のうちのどれか。最も適切なものを波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 足柄をいまだうたはぬ
- 2 イ 御所に習ひまゐらせたき
- 3 ウ え申し出でぬ
- 4 エ これかれに聞かれ候ふ

問二 傍線部②の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 自分が今様を伝授するのは筋が通らない気がするから
- 2 遠路はるばる今様を習いに来させるのは気が引けるから
- 3 季時入道を通じてものを頼むなど分不相応で滑稽だから
- 4 習う気もない今様を教えたいなど迷惑でしかないから

問三 傍線部③の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 かりそめの師に習わせていただくことは、この世の喜びと言えるのでしょうか
- 2 何としても習わせていただきたいという想いは、この世の喜びになりましょう
- 3 にせものだとしても習わせていただくのが、この世の喜びというものでしょう
- 4 どうにかして習わせていただけるのでしたら、この世の喜びでございましょう

問四 傍線部④の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 そう申し上げたら、きっとお教えになりますか
- 2 そう申し上げているなら、ぜひお教えなさいませ
- 3 そう申し上げれば、教えてさしあげるのですね
- 4 そう申すのならば、教えさせておやりなさいよ

問五 傍線部⑤の主体として、最も適切なものを二重傍線部①～④の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ① 延寿
- 2 ② これら
- 3 ③ 乙前
- 4 ④ 我

問六 空欄【6】に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 教へむ
- 2 教へし
- 3 教へらるる
- 4 教へられき

問七 傍線部⑥と同じ働きの語を含むものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 のどかに物語(して)返りぬる、いとよし
- 2 三十あまりに(して)さらにわが心と一つの庵をむすぶ
- 3 もとより友とする一人二人(して)行きけり
- 4 いたりかしこく(して)、時の人におぼすなりけり

問八 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 あこ丸の今様は伝授の素性が知れぬため信用されていなかった
- 2 乙前は今様の伝授を望む延寿の強引な振る舞いに呆れかえっていた
- 3 延寿は別れ際に請われて歌った今様を誉められもう一曲歌った
- 4 院は今様の歌い手やその伝授に対して日頃から敬意を払っていた

【解答】

問一 2

問二 1

問三 4

問四 2

問五 4

問六 2

問七 4

問八 2

【解説】

問一 指示語の特定

傍線部①「さること(そのようなこと)」とは、直前で延寿が願った内容を指す。

延寿は「イ(御所に習ひまゐらせたまふに院に教えていただきたい)」と言った。これに対し、院(筆者)は「逆さまごと(あべこべなこと＝立場が逆だ)」と言っているわけだ。

よって、2が正解。

問二 心情把握

「かたはらいたし」は重要単語。「(そばで見ていて)ハラハラする、きまりが悪い、みっともない」という意味だが、ここでは誰に対してか？

自分(院)が、芸人風情に歌を教えるなんていうのは、名誉(名聞)ではあるが、「立場上、決まりが悪い(＝筋が通らない)」と感じている文脈だ。直後で「あこ丸(プロの歌手)に習え」と言っていることから、自分が教えるべきではないと考えていることがわかる。

よって、1が正解。

問三 解釈

「いかさまにも」は「どのようにしても(ぜひとも)」。「候はむ」は丁寧語＋推量。「こそ～め」は係り結び(強意)。

直訳すれば、「(あこ丸ではなく)どのようにしても、(あなた様に)習わせていただきますようなことが、この世の喜びでございましょう」。

「何とかして習いたい」という強い願望を表している4が最も適切。

1「かりそめの師」、3「にせもの」は「いかさま」の現代語的誤読を誘うひっかけだ。

問四 会話文の解釈

話し手は乙前(熟練の歌い手)。「さ申さば」は「(延寿が)そのように(熱心に)申すならば」。

「教へさせたまへかし」の「させ」は最高敬語(尊敬)、「たまへ」は尊敬の命令形(～なさいませ)、「かし」は念押しの終助詞(～よ)。

つまり、院に対して「教えておやりなさいませよ」と進言している場面だ。

よって、2が正解。

問五 主語の特定

「似せぬところ(延寿の下手な部分)」を「かたはらいたくおぼえて(みっともなく思っで)」、「え直さで(直すことができなくて)」、「d(我)、良くなるまでうたひてぞ【6】」。

下手なのは延寿。それを見て「みっともない」と思うのは、教える側の院(我)だ。

「え直さで」は、「(言葉で注意しても)直せなくて」あるいは「(放置して)そのままにしておけなくて」というニュアンス。

何より、その後の「良くなるまで歌って教えた」のは誰か？ 先生である「我(院)」だ。

文脈上、主語は一貫して「我」である。よって、4が正解。

問六 文法(係り結びと活用)

「ぞ」があるから、結びは連体形になる。

「教ふ」は下二段活用(へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ)。

過去の助動詞「き」の連体形は「し(せ・〇・き・し・しか・〇)」だ。

「教へ・し」となる。よって、2が正解。

問七 文法(識別)

「感に堪へずして」の構造分解だ。

「堪へ(動詞)」+「ず(打消の助動詞の連用形)」+「して(接続助詞)」。

つまり、「活用語の連用形+して」の形を選べばいい。

1「物語して」=「物語す(サ変)」の連用形「物語し」+「て(接続助詞)」。※「して」を一つの語と見ない。

2「三十あまりにして」=断定の助動詞「なり」の連用形「に」+「して」。

3「一人二人して」=格助詞の「して」(手段・方法・同伴)。

4「いたりかしこくして」=形容詞「かしこし」の連用形「かしこく」+「して」。

構造として、形容詞・助動詞(活用語)の連用形に接続して状態を表す4が最も近い用法だ。

(※「ず・して」は、打消の連用形+して。「く・して」も形容詞の連用形+して。この「して」は状態を表す接続助詞的用法で共通する)

問八 内容合致

消去法で考える。

1 延寿は「あこ丸は、誰に習ったかわからない(素性が知れない)」と言っている。○。

3 「疾く(早く帰れ)」と言ったのを呼び返して歌わせ、褒美をやった。その際「四大声聞……」という今様(別の歌)を歌ったので、褒美(衣)を与えた。○。

4 院は「名聞」「神妙なり」「興がりて」など、今様に対して並々ならぬ情熱と敬意を持っている。○。

2 乙前は「いたくいふ(ひどく強く言っている=熱心だ)」と言い、その後「教へさせたまへ(教えておやりなさい)」と助け舟を出している。

「呆れかえっていた(マイナス感情)」は不適當。よって、2が誤り(正解)。

【現代語訳】

五月、花の盛りの頃、江口や神崎の遊女、美濃の傀儡子(くぐつ・旅芸人)たちが集まって、(仏前に)花をお供えしたことがあった。

今様歌の話が出た時に、「延寿(遊女の名)が、『恋せば』という足柄(の曲)をまだ歌ったことがないので、院(私・後白河院)に習い申し上げたいが、とても言い出せないと、あちこちの人に言っているそうです」という(噂)話を聞いたけれども、(私は)聞き入れないふう(無視)していたところ、季時入道を通じて(延寿が正式に)申し出てきた。

(私は)「どうしてそのようなことがあろうか(いや、ない)。(身分的に)あべこべなことであるよ。(プロの歌い手に素人の私が教えるなど)私にとっては名聞(名誉)なことではあるが、筋が通らずきまりが悪い。『さはのあこ丸』が歌っているようだ。その者に習いなさいよ」と返事と言った。

延寿がまた申すには、「(あこ丸ではなく)ぜひともあなた様に教えていただきますことこそ、この世の喜びでございましょう。あこ丸については、大進も小大進もみな(師匠筋を)存じ上げておりませんので、誰に習ったのかと素性が知れず不安でございします。また周囲の者たちも、そのように(院が教えるべきだと)申しますので、あれこれと(板挟みになって困ります)」と申すので、

(私は)「あとにしよう。周囲の者たちがいる時に(教えると)、(芸を)聞き取られてしまうだろうから。お前がひとりである時に、それなら教えよう」と言ったのを、(延寿が)「(皆が帰った後)残りともまって習いましょう」とひどく熱心に言ったので、(私は師匠である)乙前に「(延寿が)ひどく熱心に言っている。どうしようか」と語ったところ、

(乙前が)「そう申すのならば、教えておやりなさいませよ。そのようにたいそう望んで申すならば、(あなたの芸能は)そのような(伝授する)ためのものでございしますよ」と申したので、夜な夜な二、三日ほどの夜に教えてやったのだ。

(延寿の歌が私に)似ていないところも、(私が聞いていて)ハラハラしてみっともなく思われて、言葉では直せなくて、私自身が、良くなるまで歌って教えたのだった。

その後、(延寿が)退出の挨拶をした時に、「早く(帰れ)」と言ってあったのを(気が変わって)呼び返して、(習った歌を)歌わせて聞いたところ、「感心な出来栄だ」と(私が)言って、

『四大声聞いかばかり 喜び身よりも余るらむ われらは来世の仏ぞと 確かに聞きつる今日なれば』

(釈迦の四大弟子たちはどれほど喜びが身に余ったことだろう。我々は来世の仏であると確かに聞いた今日であるからには。※延寿が院から直接伝授を受けた喜びを、仏の教えを聞いた喜びに重ねて歌ったもの)

と歌ったので、(私は)感動に堪えられず、唐綾の染付(模様染め)の着物二枚を褒美として与えた(のだった)。

その折々のこととしては、面白く思われたことであった。

【練習問題】

Q1(重要単語)

次の古文単語の意味として、最も適切なものを一つ選べ。

「かたはらいたし」

ア 腹が立つ・不快だ

イ 苦しい・病気だ

ウ みっともない・きまりが悪い

エ 笑止千万だ・滑稽だ

Q2(呼応の副詞)

次の現代語訳を答えよ。

「え直さで」

Q3(文法・助動詞)

次の文の「め」の文法的説明として正しいものを一つ選べ。

「いかさまにも習ひまゐらせて候はむこそ、この世のよろこびにては候はめ。」

ア 推量の助動詞「む」の已然形

イ 意志の助動詞「む」の命令形

ウ 当然の助動詞「べし」の已然形

エ 現在の比況の助動詞「まじ」の連体形

Q4(文法・接続)

次の文法説明のうち、誤っているものを一つ選べ。

ア 「ずして」の「ず」は、打消の助動詞の連用形である。

イ 「くして」の「く」は、形容詞の連用形活用語尾である。

ウ 「いみじくして」の「して」は、サ変動作「す」の連用形である。

エ 「二三日して」の「して」は、時間を表す格助詞である。

Q5(敬語・重要表現)

次の傍線部の敬語の種類と、誰に対する敬意か(敬意の方向)を答えよ。

「帝、御文を書かせたまふ。」

【練習問題の解答】

A1 答え:ウ

「かたはらいたし」は漢字で書くと「傍ら痛し」。そばで見ていて心が痛む、という意味だ。

ここから二つの方向へ意味が派生する。

①(相手が未熟で)見ていられない、みっともない、苦々しい。

②(相手が立派すぎて・自分が未熟で)そばにいるのが気恥ずかしい、きまりが悪い。

入試ではこのプラス・マイナス両方の意味が出るが、核にあるのは「そばにいて心がチクチクする感じ」だ。

A2 答え:直すことができなくて

「え～(打消)」の形だ。「え」の下に打消語(ず・じ・で・まじ、など)が来たら「～できない(不可能)」と訳す。これは古文の鉄則中の鉄則。

「で」は打消の接続助詞。「～ないで」「～なくて」と訳す。

よって「直すことができなくて」となる。

A3 答え:ア

「こそ」があるから係り結びの法則で、文末は「已然形」になる。

「候は(ハ行四段・未然形)」に接続している「め」なので、助動詞「む」の已然形だと判断する。

文脈的に「～だろう」という推量の意味だ。

「む」の活用

(○・○・む、むず・む、むずる・め、むずれ・○)は一瞬で言えるようにしておこう！

A4 答え:ウ

「いみじくして」の「いみじく」はシク活用形容詞「いみじ」の連用形。

形容詞の連用形につく「して」は、状態を表す接続助詞だ。

「サ変の連用形」ではない。サ変なら「勉強して(勉強す＋て)」のように動作を表す。

ア・イ・エはすべて正しい説明だ。特にエの「～して(～を経て)」という用法は重要！

A5 答え:最高敬語(二重敬語)、帝に対する敬意

「させ(尊敬の助動詞「さす」の連用形)」+「たまふ(尊敬の補助動詞)」の形。

尊敬+尊敬で、最高敬語と呼ばれる形だ。

これは原則として、皇族やそれに準ずる極めて高貴な人物(ここでは帝)の動作に使われる。

主語(帝)を高めるので、当然、帝に対する敬意だ。

「～させ給ふ」を見たら「あ、主語は偉い人だな」と即座に反応しよう。これが主語特定のヒントになる。